第一話　まことの味

日本橋川北岸の通りに立てば、むわっとした魚のにおいに全身を包み込まれた。磯の香りに混じっているのは、死んだ魚の血肉が放つ独特なにおいだ。貝や海藻のにおいも漂ってくる。

ちはるは辺りを見回した。

早朝の魚河岸は、魚を求める者たちで溢れ返っている。

向こう鉢巻きをしめた尻切れ半纏の男は、魚を仕入れにきた棒手振だ。着流し姿の男は、料理人か。紋付姿の二人連れは、武家の買い出し人であろう。

「おい、その鯛はいくらだ。平目は――」

「何ぃ、三貫にしろってか⁉　寝言は寝て言えってんだ、この野郎！　安くまけて四貫だって言ってんだろうが！　それ以上は、びた一文まけねえからなっ」

「ぐずぐずしてんじゃねえよ。さっさと茶屋札を出しやがれ」

「てやんでいっ、一昨日来やがれってんだ！」

あちこちで怒声が響き渡っている。

ちはるは改めて鼻から息を吸い込んだ。冬の冷たい風が、魚のにおいを一瞬だけ押しのける。

と同時に、ちはるの右を通り過ぎていった男たちの体臭が鼻先に押し寄せてきた。魚のぬめりと汗のにおいが入り混じったような男くささだ。

ちはるは思わず反対を向く。

「あれ――？」

思わず声を上げた。

何度も鼻を動かして、すんすんと辺りのにおいを嗅ぐ。

ついさっきまで海の中を泳ぎ回っていたような、新鮮な魚のにおいがした。

においを辿れば、板舟にずらりと並べられた鯵のもとへ行き着いた。

板舟とは、魚を並べて売るための板だ。魚問屋の軒先から通りへせり出している。

がやがやとした雑踏に背を向けて、ちはるは板舟の前に陣取った。

どれもみな大きさのそろった鯵だ。おれさまを食えるもんなら食ってみろ！　と啖呵を切っているような顔つきが凛々しく、澄んだ黒目が美しい。

「美味しそう……」

呟いた口の中に唾が溜まる。

この場で下ろして、刺身にしたい。やはり生姜醤油か――いや、鯵の甘みをしっかり味

わうならば、ほんの少しの醤油だけでいいのでは――。
ちはるは振り返った。
「慎介さん！」
朝日屋の板長、慎介を手招きする。
「この鰺を買いましょうよ。絶対に美味しいですよ」
慎介は白髪交じりの頭をかきながら、歩み寄ってきた。
「勝手に動き回るんじゃねえと言っただろう」
「すみません」
軽く頭を下げてから、ちはるは板舟の上の鰺を指差した。
「あまりにも新鮮なにおいがしたもので、つい――」
慎介は顔をしかめて、自分の鼻の頭に指を当てた。
「おめえの鼻が犬並みによく利くってえのは、おれも承知しているが、勝手にうろちょろされちゃ困るぜ」
慎介は腕組みをして、鰺に目を移した。しかめっ面から一転、目を輝かせて唸る。
「なるほど……こいつぁ立派な鰺だ」
「買いましょう！」
ちはるは勢い込んだ。

「刺身にしますか？　塩焼きにしますか？　それとも、煮つけや南蛮漬けにしますか？」
「てめえに売る魚なんかねえ！　とっとと帰れ！」
背後から低く響いてきた大声に、ちはるの腰がぞくりと震えた。
振り向けば、向こう鉢巻きをしめた仲買人が仁王立ちしている。
年の頃は三十か。まくり上げた袖から見える腕はたくましく、がっちりした体つきだ。足元は下駄――常に売り場がぬかるんでいるので、魚河岸の男たちは草履ではなく下駄を履いている。
近くで桶を洗っていた男が、すすいだ水を勢いよく捨てた。仲買人の素足に水飛沫がかかる。ちはるは思わず、ぶるりと身を震わせた。だが仲買人は、まるで冷たさなど微塵も感じていないかのように平然としている。
仲買人は肩を怒らせ、鋭い眼光で慎介を睨みつけた。
「よくも、おれの前に顔を出せたもんだな」
深く艶のある美声が耳の穴から入ってきて、ちはるの体の芯をずしんと突いた。
ちはるは仲買人の顔を凝視する。いかつい顔は、荒っぽい気性そのものに見えるが、発せられた声はまるで歌舞伎役者か何かのようだ。
今にも出刃包丁を突きつけそうな勢いで、仲買人は慎介に一歩迫った。慎介は冷静な表情で、仲買人を見つめている。

「鉄太さん、この鰺はいくらだ？」
「あぁん？」
鉄太と呼ばれた仲買人は、眉間に深くしわを寄せて、ますます険しい形相になった。
「慎介さんよ、ついに耄碌したか。おれは『てめえに売る魚なんかねえ』と言ったんだぜ。耳が遠くなって、聞こえなかったか？」
「ちゃんと聞こえていたさ」
慎介は挑むような目で鉄太を見つめ続けた。
「その上で、この鰺を売ってくれと言ったんだ」
鉄太の額に青筋が浮かぶ。
「同じことを何度も言わせるんじゃねえ。てめえに売る魚なんざ、一匹たりともねえんだよっ」
鉄太は腕組みをして、そっぽを向いた。怒りを噛むように歯ぎしりをしていた口元が、はっと何かを見つけたように開く。
鉄太の目線を追えば、着流し姿の中年男が一人、こちらを向いて立っていた。羽織はまとっておらず、寒風の中を軽やかな足取りで近づいてくる。すぐ後ろには、尻端折りに股引姿の若い男が二人続いていた。
中年男は板舟の前まで来ると、ずらりと並んだ鰺を端から端までじっと見回した。納得

したようにひとつうなずいてから、顔を鉄太に向ける。
「全部くれ」
「へいっ」
即答する鉄太に、中年男は代金を渡した。
若い男たち二人が持参してきた木桶（きおけ）の中に手際よく鰺を入れていく。
「ちょっと！」
ちはるは思わず叫んだ。
「うちが先に、鰺を買うって言ったのよ⁉」
若い男たちの手が止まる。
「おい」
中年男のひと声で、若い男たちは再び手を動かし始めた。
ちはるは憤然として、鉄太と中年男の前に立つ。
中年男が初めて、ちはるを見た。冷たい眼差しが注がれる。ちはるは、むっと顔をゆがめて中年男を睨みつけた。中年男は少しも動じることなく、慎介に目を移す。
「慎介さんが連れてきたってことは、これが噂（うわさ）の、朝日屋の女料理人かい」
知り合いだったのかと目で問えば、慎介が神妙な顔でうなずいた。
「こちらは百川（ももかわ）の料理人、仁平（じんぺい）さんだ」

ちはるは目を見開いた。

百川といえば、日本橋瀬戸物町の浮世小路にある高級料亭だ。日本橋室町三丁目にある旅籠、朝日屋からは、目と鼻の間の距離にある。

仁平は矜持を示すように、ぐいと胸を張った。

「慎介さんが腕を振るっていた福籠屋に、おれは一目置いていたんだ」

仁平は悔しげに目を伏せる。

「それが、あの騒動だ。見損なったなんてもんじゃねえぜ」

福籠屋は、慎介が営んでいた料理屋だ。去年現れた商売敵の嫌がらせを受け、潰されてしまった。

鰺のつみれの中に蚯蚓の肉を混ぜ込んだという噂を立てられたり、やくざ者を送り込まれたり、慎介は散々な目に遭ったと、ちはるも聞いている。

極めつけが、右腕の怪我だ。

店で暴れたやくざ者に殴る蹴るの乱暴を受け、竈に突き飛ばされて煮えた湯を浴びた慎介は右腕に大火傷を負った。刃物でつけられた傷と相まって、それまでと同じようには手を動かせなくなってしまったのだ。今でも、たまに痛みが走るらしい。

朝日屋は、潰れてしまった福籠屋の間取りを直して開いた旅籠なのだ。家主（地主）の娘婿である兵衛が、かつての恩を返そうと奔走し、慎介を料理人として踏みとどまらせた。

「おれは朝日屋なんか認めちゃいねえぜ」
挑むような目で、仁平は慎介を睨んだ。
「あんたは料理人の面汚しだ」
板舟に載っていた鰺がすべて桶に移された。仁平が顎をしゃくって合図すると、百川の若い衆が桶を運び去っていく。
そのあとを追って歩き出した仁平が、ふと足を止めた。振り返って、思い出したように慎介を見やる。
「美味い料理で客を呼ぶなどと言っているらしいが、しょせんは旅籠——朝日屋は、料理屋じゃねえんだ。口当たりのいい包み揚げで、多少の評判を呼んだらしいが、百川と同じ土俵に上がれるだなんて夢にも思うんじゃねえぞ」
言い捨てると、仁平は踵を返して去っていった。
雑踏にまぎれていく仁平の後ろ姿を、ちはるはじっと睨んだ。
悔しい——。
ちはると慎介が苦心して作り上げた包み揚げを馬鹿にされたのだ。助力してくれた天龍寺の住職、慈照の厚意も踏みにじられた気分だ。
「おれも朝日屋なんか認めねえよ」
体の芯に響く低い声に、ちはるは振り返った。

がらんと空いた板舟の前で、鉄太が拳を握り固めている。
「商売替えをして、看板に掲げる名を変えたって、人の性根はそう簡単には変わらねえんだ」
「誤解なんですよ！」
ちはるは鉄太に詰め寄った。
「慎介さんの悪評は全部嘘です！　慎介さんは、やくざ者とは何の関わりもないんですよ。もちろん、鯵のつみれの中に蚯蚓の肉を混ぜたなんていう噂も嘘です」
「全部嘘だと――？」
鉄太はぎろりと、ちはるを見下ろす。
「冗談じゃねえ。嘘のせいで、おれは客の信用を失ったのか」
鉄太の目の奥が、ほの暗く揺れた。まるで冬の陽炎のように。
「蚯蚓の肉が混ぜ込まれたと噂された、鯵のつみれ――あの時の鯵は、おれが売った鯵だったんだ」
鉄太は自嘲するように、ふんと鼻を鳴らした。
「あの噂が立った時、おれだって耳を疑ったさ。まさか慎介さんが、そんな真似をするはずがねえ――何かの間違いだって思った。だがよ。『いくら何でも、わざわざ蚯蚓を取ってきて混ぜ込んだりはしないだろう』って慎介さんをかばったやつは、おれに疑いの目を

向けてきやがったんだ。『鰺が悪かったんじゃないか』ってな」
空になった板舟に目を落として、鉄太は唇を噛む。
「あの野郎、おれが腐りかけた鰺を売ったような言い方をしやがったんだ。だから、つみれの味が落ちて『蚯蚓でも混ざっているんじゃねえだろうな』なんて悪評が立ったんじゃねえかって――」
鉄太は顔を上げて、慎介を睨んだ。
「あの日おれが売った鰺は、魚河岸の中で一番の上物だったはずだ」
慎介は真っ向から鉄太の眼差しを受け止めて、うなずいた。
「それは間違いねえ。鉄太さんが扱う魚は、いつだって立派だ」
鉄太は唇を震わせた。
「じゃあ何で、鰺のつみれに蚯蚓が混ぜられたなんて噂が立ったんだ⁉　うちの魚に非がねえんなら、福籠屋に非があるとしか考えられねえだろうっ」
鉄太は胸の前で両手の拳を突き合わせた。
「福籠屋のせいで、うちが扱う魚は物が悪いっていう噂を立てられたんだ。とんでもねえ、とばっちりだ。だが、いったん出回った悪評は次から次へと広まっちまって、なかなか消せなかった」
「それは慎介さんも同じです！」

ちはるは声を張り上げた。

「悪いことなんか何もしていないのに、ある日突然、悪者にされて――」

重苦しいやるせなさが胸の奥からぐっとせり上がってくる。

ちはるの実家、夕凪亭が乗っ取られた時のことを思い出した。

本所松井町一丁目の町家に両親が開いた料理屋は、小さい店ながらに繁盛していた。客は、近所の親父たちや、仕事の合間に立ち寄る船頭たち――近くの武家屋敷からお忍びでやってくる二本差しのお侍もいた。

父は調理場で包丁を握り、母は注文取りとお運びを受け持った。ちはるは父の下で台所仕事をこなしながら、母の手が回らない客のもとへ直接料理を運んだりもしていた。

父の料理を贔屓にしてくれる客たちで、いつも店内はいっぱい。その中で両親とともに働くのが、ちはるは好きだった。その暮らしは、ずっと変わらないと思っていた。

それが去年の霜月（旧暦の十一月）に、状況は一転してしまった。雇われ料理人として夕凪亭に入ってきた久馬のせいだ。

久馬は、店主の父に従順で、よく働いた。ちはるにも親切な態度だった。

だが、その裏で、店を乗っ取るために様々な画策をしていたのだ。

慎介の福籠屋と同じく、夕凪亭の料理にも悪評を立てられた。

ちはるが悪評を知ったのは、今年の睦月（一月）に入ってすぐのことだった。

青物（野菜）の仕入れ先が、夕凪亭の公言した場所とまったく違う――売れ残りの傷んだ魚を使っていた――夕凪亭の料理は嘘だらけだ――。

あっという間に、夕凪亭は馴染み客たちの信用を失ってしまった。

しまいには、夕凪亭が闇商人から異国の食材を仕入れているという噂まで立てられた。根も葉もない馬鹿々々しい噂だったが、実際に火盗改の同心たちが来て、両親を手荒に問いただした。

怒鳴り散らして、床几を蹴り倒し、店の皿を割ったり――悪人を捕縛する役人ではなく、押し込んできた盗賊たちが無体を働いているとしか思えないありさまだった。

客足は途絶え、食材も手に入らない。店賃は払えず、自分たちが食べる物を買う金さえなくなった。

それでも何とか店を立て直そうとして、父は一度だけ借金をしたが、上手くはいかなかった。借金さえも、久馬の罠だったのだ。身に覚えのない借金まで背負わされ、さらに窮地へ追い込まれた両親は、泣く泣く店をあきらめた。

ちはるたち親子三人が着の身着のまま夕凪亭を追い出されたのは、今年の如月（二月）――騒動が起こってから、ひと月あまり――人生が一転した怒濤の日々だった。

久馬は用意周到だった。夕凪亭に入り込む前から立てていたであろう企てに、ちはるたち親子はまんまとはめられてしまったのだ。

知人の世話で裏長屋に落ち着いたのも束の間、心労が重なって弱った両親は次々と寝込み、失意の中で相次いで死んでいった。

「んなもん知らねえよ！」

吐き捨てるような鉄太の声に、ちはるは引き戻された。

我に返れば、ちはるは魚河岸の喧騒の中に立ちつくしていた。目の前には、憎々しげな顔でちはるを見下ろす鉄太がいる。

「ふざけるんじゃねえや。何が『慎介さんも同じです』だ。一緒くたにされちゃ困るぜ。『悪いことなんか何もしていないのに、ある日突然、悪者にされて』だと⁉　おれは、この目で、福籠屋の騒動を見たんだぜ！」

「それは――」

ちはるは言葉を詰まらせた。鉄太が畳みかける。

「店の中で、やくざ者たちが暴れていた。客に料理を食わせるどころじゃねえや。やつらは通りを行き来する者たちにも罵詈雑言を浴びせて絡み、隣近所にも散々迷惑をかけたんだぜ。一時は、あの通りを歩く者さえ途絶えたんだ。柄の悪い連中がたむろしている場所になんか、誰も近寄りたくはねえからな。若え娘のいる家は、引っ越しまで考えたそうだ」

ちはるは唇を引き結んだ。

福籠屋に起こった出来事を、ちはるは人づてに聞いただけだ。実際に自分の目で見たという鉄太の剣幕に押されてしまう。

「外から見たって、福籠屋の中が荒れている様子は、よぉくわかった。そんな店に、魚を売れるかってんだ。喜んで食べてくれる人のもとへ届けたくて、おれは魚を売っているんだぜ。魚の命を無駄にするつもりは一切ねえ。人の口の中で輝く美味い命を、おれは扱っているんだ」

慎介さんだって、喜んで食べてくれる人のために料理を作っていた——そして今も作り続けている——そう訴えようと、ちはるは口を開いた。

しかし声を出す前に、後ろから慎介に肩をぐいっと引っ張られる。その勢いで、ちはるは一歩下がった。

慎介が鉄太の前に出て、深々と頭を下げる。

「すまなかった！」

腹の底からしぼり出したような慎介の声が辺りに響いた。

「鉄太さんにまで迷惑をかけていたなんて、今の今まで知らなかったんだ。許してくれ！」

膝に頭がつきそうなほど深く頭を下げ続ける慎介を、鉄太はぎろりと睨みつける。

「許せねえな」

鉄太は右足で何度も小刻みに地面を蹴った。慎介の頭を踏みつけたい衝動(しょうどう)を、必死に

こらえているかのようだ。
「藤次郎さんのおかげで、何とか周りの信用を取り戻せたが――慎介さんへの怒りは収まらねえ」
慎介は頭を下げながら両手の拳を握り固めている。
ちはるは慎介の隣に並んだ。
「じゃあ、どうしたらいいんですか。どうしたら、慎介さんを許してもらえるんですか？」
鉄太はいらいらした表情で、地面を小さく蹴り続けた。
「朝日屋なんかやめちまえ。未練たらしく料理にしがみついてないで、さっさと包丁を手放せよ。そうしたら、考えてやらぁ」
「そんな――」
ちはるは頭を振った。
「料理と無縁の暮らしをしろだなんて、あまりにも酷じゃありませんか。慎介さんは、ずっと料理人として生きてきたし、これからだって、その生き方しか――」
「じゃあ許さねえよ」
鉄太の鋭い声が即座に返ってきた。慎介が、のろのろと顔を上げる。
「誰に何と言われようが、料理人をやめることだけはできねえ」
鉄太の厳しい眼差しを毅然とはねつけるように、慎介は背筋を伸ばした。

「あの騒動で、おれも料理人をやめようと思った――だが、引き止めてくれた人がいる。今は、一緒に仕事をしたい者たちもいる。それに何より、また食べにきてくれる人たちがいるんだ。だから、おれは料理から逃げるわけにはいかねえ。死ぬまで向かい続ける覚悟だ」

鉄太はいまいましげに口をゆがめて顔をそらした。

「おれは絶対に、てめえを料理人とは認めねえぞ」

慎介は黙って頭を下げてから、通りへ踏み出した。

「ちはる、行くぞ」

「でも――」

「いいから来い！」

鉄太を説得したい気持ちを残しながらも、ちはるは慎介のあとを追った。

「おっ、いい鮪があるぞ」

気を取り直したような声を上げて、慎介は鮪が多く並んでいる店へ向かった。

三人の男たちが手際よく大きな鮪を下ろしている。

慎介が近づくと、三人は鮪包丁を握る手を止めて、嬉しそうに顔を上げた。

「先だって朝日屋が出した『玉手箱』は、えらく評判がいいらしいじゃねえか」

先月の重陽の節句に、朝日屋は二人の評者を呼んで、祝い膳を食べさせた。福籠屋の頃の悪評を拭えず、客が入らなかった朝日屋の存続を懸けて、町の者たちに朝日屋の料理を知ってもらおうと奮闘したのである。

その際に目玉となった品が『秋の玉手箱』――小麦粉で作った薄皮の中に、しめじ、椎茸、茄子、鮪の解し身を、餡かけにして閉じ込め、小箱のような四角い包み揚げにした料理だ。

ちはるが幼い頃から世話になっている天龍寺の住職、慈照の知恵を借り、朝日屋の板長である慎介とともに仕上げた、渾身の一品であった。

「昔っから『下魚』と馬鹿にされている鮪を使った料理が評判を呼んで、おれたちも気分がいいぜぃ」

三人の男たちは目を輝かせて、うなずき合う。

「この頃じゃあ鮪を美味いと言ってくれる人も増えてはきたが、お武家はもちろん大っぴらに食わねえし、百川みてえな高級料亭じゃ、まず出さねえもんなぁ」

かつて鮪は、陸奥などの遠方から江戸に運ばれていた。そのため新鮮な状態で江戸の者たちの口に入ることはなく、美しいはずの赤身も黒ずんでしまっていた。中毒で頭痛に襲われる者もおり、江戸では、ほとんど食べられていなかったのである。

呼び名も、古くは「しび」――「死日」に通じるといわれ、忌み嫌われた。

鮪は目の周りが黒いことから、室町の時代になって「目黒」と呼ばれるようになったが、これが訛って「まぐろ」と呼び名が変わったといわれている。

「江戸の近くでも鮪が獲れるようになって、ねぎま鍋が茶屋なんかでも出されるようになったがよぉ」

赤身しか食べられることなく、捨てられていた「とろ」の部分を葱と一緒に煮た、醤油味の鍋料理である。

とろは、江戸では「だんだら」「ずるずる」などと呼ばれていた。猫さえも食べないといわれたことから「猫またぎ」と呼ばれることもあった。

「十返舎一九の『東海道中膝栗毛』にも、ねぎま鍋が出てたなぁ」

「おうよ。葱がとろーっと、だんだらに絡みつくのが、たまらねえよなぁ」

「濃いめに作った醤油の汁が、飯にもよぉく合うんだ」

ちはるの鼻先に、こくのある醤油の汁のにおいが漂ってくる——気がした。しんなりした葱の甘いにおいと、鮪の濃厚な旨みのにおいも、よみがえってくる。

それらすべてが混ざり合って、溶け合った汁の味は、どれだけ芳醇な味わいを醸し出すだろうか——ちはるの口の中に、じゅわりと唾が湧き出た。

三人の男たちが口をそろえる。

「あぁ、酒飲みてぇ」

ごくり。

口の中に溜まった唾を、ちはるは飲み込んだ。

三人の男たちも、ねぎま鍋の味を思い出しているように、もごもごと口を動かしている。

ちはるは男たちと顔を見合わせて、互いに笑い合った。

「うちは鮪を多く扱っているから『鮪屋』なんて呼ばれているがよぉ。下魚しか置いてねえのかと、たまに小馬鹿にしてくるやつもいるのさ」

男たちは下ろしたばかりの鮪に目を向けた。

「だけど朝日屋の『玉手箱』が評判になってくれたおかげで、鮪が見直されるかもしれねえと思うと、胸が躍るぜぃ」

「ああ、まったくでぃ。わくわくすらぁ」

「魚河岸ん中でも、藤次郎さんは熱心に鮪の売れ行きを気にかけてくれているがよぉ」

ちはるは首をかしげた。

藤次郎――さっきも鉄太の口から出た名だ。

福籠屋のとばっちりを受けて悪評を受けた鉄太は、藤次郎のおかげで周りの信用を取り戻せたと言っていた。

ちはるは慎介を見上げる。

「藤次郎さんというのは、魚河岸で働く人なんですか？」

慎介はうなずいた。
「本小田原町にある魚問屋、恵比寿屋の跡取り息子だ」
鮪屋の男たちが目を細める。
「小せえ頃から、よぉく魚河岸を歩き回ってよぅ。あっちこっちの店に声かけて、魚の様子をじぃっと見ていなさるんでぃ」
「魚河岸には気の荒い男たちも多いがよぉ。なぜか藤次郎さんには、みぃんな従っちまうんだ」
「なぜって、そりゃあ、あれだろ。藤次郎さんは絶対に仲間を裏切らねえからよぉ。恵比寿屋の店先で魚を売っている喜八が居酒屋で二本差しに絡まれた時も、いの一番に駆けつけたそうじゃねえか。恵比寿屋の若え衆が加勢にいった時にゃ、すでに二本差しを素手で倒してたんだってなぁ」
「おう、二本差しが刀を抜く前に、のしてたって話だぜぃ。鮪包丁や竹槍を持ってった連中は『出る幕なしだった』と、ぼやいてたんだってなぁ」
藤次郎は相当、腕っぷしが強いらしい。刀を持った侍を相手に、無礼討ちを恐れることなく向かっていくとは――いかつい大男なのだろうか――。
「おっと。噂をすれば、藤次郎さんだぜぃ」
鮪屋の目線を追って、ちはるは振り向いた。

髷を鰡背銀杏に結った粋な美丈夫が通りを闊歩してくる。年の頃は二十二、三か――ちはるが思っていたより若い。

白波模様の入った藍墨茶色の着流しをまとい、裾からちらりと紅襦袢を覗かせている。足元は、もちろん下駄だ。

「まるで、伊達男を演じる役者みたいですねえ」

ちはるが思い描いていた「いかつい大男」とは、まったく違った。日本橋界隈を歩けば、きっと若い娘たちが見惚れるだろう。

ちはるが感嘆の息を漏らせば、鮪屋の男たちが胸を張る。

「何言ってんだ、逆だぜぃ。役者どもが、魚河岸の男たちの真似をしたのよ」

「そうさ。元禄の世に粋人たちの間で流行った本田髷だって、もとは魚河岸から始まったともいわれてんだ。魚河岸がある本小田原町の『本』と『田』を取って、本田髷と呼ぶようになったって話だぜぃ」

じっと見ていたら、藤次郎がこちらへ顔を向けた。

大股で、まっすぐに向かってくる。

「慎介さん」

あっという間に目の前にきた藤次郎が、慎介の真正面に立った。

「鉄太と話をしなすったそうで」

物腰も丁寧で、柔らかい。とても二本差しを素手でのした人物とは思えない。
慎介は苦笑した。
「ずいぶんと耳が早えな」
「ちょうど近くまで来ていたんで、鉄太んところへ寄ったんですよ。鉄太のやつぁ、慎介さんに魚を売らなかったそうですね」
「仕方ねえよ」
慎介は足元に目を落とした。
「あの騒動じゃ、鉄太さんにも、ずいぶんと迷惑をかけちまったそうで――おれは自分のことだけで手一杯で、今日の今日まで知らなかったんだ。何とも情けねえ話だ。藤次郎さんの手もわずらわせちまったらしいじゃねえか。本当に、申し訳なかった」
慎介は深々と頭を下げた。
「やめてくだせえ。顔を上げてくだせえよ」
藤次郎は眉間にしわを寄せて、慎介の肩を叩いた。
「おれは、たいしたこたぁ何もしていねえんです。ただ、親父に『あれほどの料理を作れる男が、てめえの味をわざと落とす真似をするのか？』って聞いただけなんですよ」
慎介が顔を上げる。藤次郎は満足げに笑った。
「親父は親父で、思うところがありましたようで。問屋仲間と何やら話をしたあと、鉄太

を悪く言ったやつらんところへ出向きましてね。『役立たずの目ん玉よぉく見開いて、鉄太の仕事ぶりをしっかり見極めてから、ものを言いやがれ』ってなことを、じっくり言って聞かせたそうですよ」

鮪屋の三人が、ぶるりと肩を震わせる。

「その『じっくり』ってのが、また、おっかなかったそうで」

「船で沖へ運ばれて、海ん中へ沈められるかと思ったそうですぜぃ」

「おれたちは、その場にいなくてよかったですよ。いたら、小便ちびってたかもしれねえや」

藤次郎はからかうような目で三人を見た。

「今の言葉、しかと親父に伝えておくぜ。一助と二助と岩五郎が、親父を鬼のような男だと思ってるってな」

三人は顔を強張らせて、ぶるぶると首を横に振る。

ちはるは鮪屋の男たちの顔を、じっと見た。

一助、二助とくれば、三助と続きそうなところだと思ったが、やはり兄弟でもなければ、そんな名づけにはならないだろう――しかし、よく見れば、三人の顔つきはどこか似ている――。

思わずまじまじと鮪屋たちを見続けていたら、藤次郎がちはるに向かって笑いかけてき

た。

「一助と二助が兄弟で、岩五郎は従弟なんだ」

ちはるは思わず「なるほど」と声を上げる。身内であれば、似ていることに何の不思議もない。

「おめえが朝日屋の女料理人、ちはるかい」

藤次郎は感心したように目を細める。女だからと侮っている様子は見えない。

「あたしのことを知っているんですか？」

藤次郎は「当然だ」と言わんばかりの顔で腕組みをする。

「うちから朝日屋までは目と鼻の先だ。おめえたちの話も耳に入ってきてるぜ」

藤次郎は腕組みをしたまま、右手のひと差し指を立てた。

「武士の身分を捨てた、元火盗改の旦那が主の旅籠とくりゃ、町で酒の肴にされるってもんよ」

藤次郎は続けて、右手の中指を立てる。

「家主の望月屋に娘婿として入った兵衛さんが、朝日屋の後見で――」

藤次郎は右手の薬指を立てた。

「明神下の水茶屋で茶汲み女をしていた、とても三十路過ぎには見えねえ美人の、たまおが仲居――」

藤次郎は右手の小指も立てた。
「乙姫一座の人気女形だった、綾人が下足番で――」
藤次郎は腕組みを解いて、左手の人差し指を慎介に向けた。
「福籠屋の元店主で料理人の、慎介さんが板長――朝日屋の調理場は、座り板じゃなくて、立って料理をする作りなんだってな。調理場と入れ込み座敷の間には、背の低い簡単な仕切りしかねえから、料理人の仕事が客から丸見えだって話じゃねえか」
藤次郎の人差し指が、ちはるに向けられる。
「そして本所松井町にあった料理屋、夕凪亭の一人娘だった、ちはる――慎介さんの下で、女だてらに料理人を名乗っているらしいが――おめえは尋常じゃねえくらい鼻が利くんだってな」
ちはるは思わず身構えた。
「何だって、そんなに詳しく、あたしたちのことを知っているんですか。調べたの⁉」
藤次郎は笑い声を上げる。
「わざわざ調べなくたって、耳に入ってくるってもんよ。ここは日本橋の魚河岸だぜ。日に千両もの金が動く場所だ」
藤次郎は辺りを見回して、誇らしげに胸を張った。
「金が動く場所には、いろんな者が集まる。いろんな者が集まれば、当然、いろんな話も

入ってくるさ」

ちはるは首を巡らせた。

魚を売る者、魚を買う者たちで、ごった返している——その中で、気安げに談笑している者たちもいた。親しくなれば、食にまつわる話以外にも、さまざまな話題が出るのかもしれない——。

朝日屋も、ちはるが思っていた以上に世間の口に上っているのだろうか。

「せいぜい繁盛して、鮪を出世させてくれよ」

藤次郎は店先に並んだ鮪を見下ろした。

「おれは、こいつらを下魚とは思っちゃいねえ」

藤次郎は、ちはるに目を移した。

「魚に貴賤なし——よく覚えておいてくれ。魚を粗末に扱うやつを、おれは絶対に許さねえからな」

ちはるは真摯にうなずいた。

「よし、わかってりゃいいんだ——」

再び鮪に目を戻した藤次郎が、ぎょっとした顔になった。目を見開いて、唇を震わせている。

「てっ——てめえ——何やってんだ！」

鮪に前足を伸ばしていた三毛猫が、びくっと身をすくめた。
「大事な魚に触るんじゃねえぞ、こらっ。一助、二助、岩五郎、さっさと猫をどけろ！鮪に近づけるんじゃねえっ、馬鹿野郎！」
さっきまでの穏やかさは消え去り、藤次郎の額に青筋が立った。
三人は慌てて猫を追い払おうと、両手を振って「しっし」と叫ぶ。
だが猫は逃げない。
藤次郎は拳を振り上げた。
「早く猫をどかせと言ってんだろうっ」
一助、二助、岩五郎を蹴り飛ばして、藤次郎は叫んだ。
「大事な商売物を盗られそうになったんだぞ！　もっと鮪に気を遣え！　猫に舐められてんじゃねえぞっ、馬鹿野郎！」
尋常ではない剣幕だ。
藤次郎の魚への思い入れは、これほどまでに熱く激しいのかと舌を巻いた。
ちはるは猫を相手に、ここまで激しく怒れるだろうか――だが、もし猫に調理場を荒らされてしまえば、せっかく得た客の信用を失ってしまうかもしれないのだ。信用を失うことの恐ろしさは、夕凪亭を乗っ取られた一件で、ちはるも身に染みている。これからは、どんなに可愛らしい猫が相手であっても、心を鬼にして厳しく追い払わねばならぬと思っ

た。

商売とは厳しいものなのだ――藤次郎の姿から、ちはるは改めて心に刻んだ。

鮪屋の三人に怖い顔で取り囲まれ、近くの地面を下駄で蹴られて、やっと猫は逃げていった。藤次郎の表情が少しゆるんで、鮪屋たちは「やれやれ」と息をつく。

ちはると慎介は鮪を買うと、朝日屋へ戻った。

「おまえたち、鰺を買うと言って、威勢よく出ていかなかったか？」

調理場へ顔を出した怜治は調理台の上の鮪を見て眉をひそめた。

「昼の賄は、鰺の刺身が食えると思ってたのによぉ」

善良な町人に絡む三下のように、怜治は口をひん曲げて鮪に顔を寄せ、赤身の塊をじろりと睨んだ。

魚河岸の男衆が荒っぽいとすれば、怜治は柄が悪いのか――比べるのも申し訳ないと、ちはるは呆れた。

顔をしかめて鮪の赤身を睨みつける姿を見れば、怜治が武士だったとはまったく信じられない――火付盗賊改、略して火盗改は、拷問もためらわぬ手荒な詮議を行うとして町の評判も悪いが、怜治に限っては生まれつき気性が悪いのではないだろうかと思う。

「昼の賄の話をする前に、やらなきゃいけないことはないの？」